新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第二章（だいにしょう）　実践（じっせん）

団結（だんけつ）

汝(なんじ)、蘭室(らんしつ)の友(とも)に交(まじ)わって麻畝(まほ)の性(しょう)と成(な)る。

（002 立正安国論(りっしょうあんこくろん)

団結(だんけつ)43ページー5行）

あなたも蘭室(らんしつ)の友(とも)、つまり日蓮(にちれん)のもとへ来(き)て帰伏(きぶく)することによ

り、蓬(よもぎ)のように曲(ま)がっていた邪心(じゃしん)が、麻(あさ)のごとくすなおな正信(しょうしん)に

なることができたのです。

外道・悪人は如来の正法を破りがたし。仏弟子等、必ず仏法を破るべし。「師子身中の虫の師子を食む」等云々。大果報の人をば他の敵やぶりがたし、親しみより破るべし。

（122 佐渡御書

団結 1286ページー7行）

外道（仏教以外の教えをたもつ人）や悪人は、仏の説いた正しい法を破ることはできません。むしろ仏の弟子たちが内から仏法を破るものなのです。それはちょうど師子の体内にすむ害虫

が、師子(ししし)をくうといわれているようなものです。また大果報(だいかほう)の人(ひと)を、他(ほか)の敵(かたき)は破(やぶ)ることはできません。親(した)しくしている人(ひと)たちが破(やぶ)るのです。

二人一同の儀は、車の二つのわのごとし、鳥の二つの羽のごとし。たとい妻子等の中のたがわせ給うとも、二人の御中、不和なるべからず。恐れ候えども、日蓮をたいとしとおもいあわせ給え。もし中不和にならせ給うならば、二人の冥加いかんがあるべかるらめと思しめせ。あなかしこ、あなかしこ。各々みわきかたきもたせ給いたる人々なり。

（185 兵衛志殿御返事（兄弟同心の事）
団結 1503ページー8行）

内(うち)より論出(ろんい)で来(きた)らば、鷸蚌(いつぼう)の相扼(あいひし)ぐも漁夫(ぎょふ)のおそれ有(あ)るべ恐(ぎょふ)し。

（185 兵衛志殿御返事（兄弟同心の事）
団結(だんけつ)1503ページ-11行）

この法門(ほうもん)の一門(いちもん)、いかなる本意(ほい)なきことありとも、見聞(みずき)かずいわずしてむつばせ給(たま)え。

（217 陰徳陽報御書(いんとくようほうごしょ)

団結(だんけつ)1613ページ－6行）

総じて、日蓮が弟子檀那等、自他・彼此の心なく、水魚の思いを成して、異体同心にして南無妙法蓮華経と唱えたてまつるところを、生死一大事の血脈とは云うなり。しかも、今、日蓮が弘通するところの所詮これなり。もししからば、広宣流布の大願も叶うべきものか。あまつさえ、日蓮が弟子の中に異体異心の者これ有らば、例せば、城者として城を破るがごとし。

（276 生死一大事血脈抄

団結 1775ページ－14行）

総(そう)じて日蓮(にちれん)の弟子(でし)や信者(しんじゃ)たちが、自分(じぶん)とか他人(たにん)、あれとかこれといったわけへだてする心(こころ)なく、水(みず)と魚(さかな)のような関係(かんけい)にある思(おも)いで、異体同心(いたいどうしん)に、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)えていくことを、生死(しょうじ)一大事(いちだいじ)の血脈(けつみゃく)というのです。しかも今末法(いままっぽう)において、日蓮(にちれん)が弘(ひろ)めようとしているところの究極(きゅうきょく)はこのことなのです。もしこのとおり実践(じっせん)するならば、広宣流布(こうせんるふ)の大願(だいがん)も成就(じょうじゅ)するでありましょう。もし日蓮(にちれん)の弟子(でし)のなかに異体異心(いたいいしん)の者(もの)があれば、それはたとえば城(しろ)のなかにいる者(もの)が城(しろ)を破(やぶ)るのと同(おな)じようなものです。